

防災に関する道外視察研修レポート

議員氏名 松 村 康 弘

- 1 視察先 岩手県遠野市
- 2 調査事項 沿岸被災地後方支援
- 3 所感（意見・課題・当町への反映など）

昨年9月30日に実施された自衛隊第五旅団司令部幕僚長による「大規模震災への備えを」を謹聴して、先の東日本大震災で岩手県遠野市による太平洋沿岸地域に対する後方支援の活動を紹介いただいたのをきっかけに、30年以内に必ず来るといわれる千島沖巨大地震に対し、議会として内陸にあって空港を擁するわが町の今後目指すべき方向を確認し、未来への提言をなさんと欲し今回の視察研修は実施されました。

1月1日の石川県における震度7の地震にあって、救難支援や避難所の開設、温度維持の困難さについて報道されているさ中の視察で、緊張感はいやがうえにも高まりました。

花巻空港に到着してレンタカーで移動を開始して最初に気が付いたのは、ここが東北地方を南北に縦貫する大動脈にあたり、新幹線も通る物流の背骨なのだと理解しました。空港に隣接するようにD I Yの大規模集散倉庫があり、その気になって目を凝らすと、方々にそのような倉庫が建っていました。山々を越えて一時間弱で遠野盆地の中ほどにある遠野市に到着して投宿となります。遠野物語の河童の町にやってきました。

翌朝8時40分に遠野消防本部から出迎えに来ていただき、最初の視察地「下稲荷室内運動場」、震災当時の支援物資集積分配施設に案内されました。

ちょうどシルバースポーツセンターと同規模の内部が人工芝の建物でしたが、大きく違うところが2か所ありました。一つは大きなシャッターが妻面に対向して2か所設けられ、2つ目に暖房装置として外壁と屋根の取り合い部分に石油燃料による輻射暖房装置が設置されていることでした。断熱性能もさして変わらないと思われるこの室内運動場は、被災者の無償のフリーマーケットとしても運用されたということですが、飲料水など重量物を多量に集積し凍結させない倉庫としてなど、多用途をよく考慮した公共建築であると感心した次第です。

次に遠野運動公園29haを車上より視察しました。発災時の初動においては大規模ヘリポートとなり、その後は支援部隊のベースキャンプとして大量の車両を受け入れることのできた敷地です。

これらの施設の運用に関しては前市長の「遠野市は後方支援活動を使命として求められているのだ。」という強いイニシアティブに負うところが極めて大であり、彼の主導により三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会が事前に設立され訓練

を重ね、来る日に備えていたことは結果を大きく変えたと思われます。

災害救助隊、特に自衛隊にあっては大部隊を展開させる訓練を重ねたことが実効を担保させ、後方支援基地としての遠野市の存在感を確たるものとしたといえると思います。

防災に関する道外視察研修レポート

議員氏名 松 村 康 弘

- 1 視察先 岩手県陸前高田市
- 2 調査事項 東日本大震災における消防の活動状況
- 3 所感（意見・課題・当町への反映など）

午後から一時間圏内にある陸前高田市を訪問しました。今は巨大な防潮堤と記念館を兼ねる道の駅、そして奇跡の一本松・・・

コンクリートの構造であったことをわからせる廃墟以外、かつてここに人々の暮らしがあったと思わせる、あらゆるものが枯れ草の更地となり、売地や貸地の立て看板ばかりが目につく旧市街地を越えて丘の上に立つ免震構造の消防庁舎を訪ねました。

襲ってくる大津波を危機管理の専門家として記録した映像は、テレビの映像とは次元を超えた恐怖感を私達に与えました。

消防団員の殉職、道路の啓開、様々な当時の状況をお聞きいただきましたが、私としては、特に冬場のガソリン軽油灯油の供給に関心があり、特に消防が監督官庁であることを踏まえ、危険物の指定数量と輸送・保管に関して専門的な質問をさせていただきました。

結論から言うと発災初日、2日目あたりまでは容器であれば、それがポリ缶であってもガソリンも入れられた。その後、自衛隊のヘリコプターによる遠野市からの輸送でだんだん秩序だって来た。遠野市から4トンまでのローリーやドラム缶も来るようになった。しかし、その後も14klのタンクローリーが来るのは、例外規定により建築された屋外地上タンクが整備された3月後のことであったとのことでありました。

釧路の油槽所の機能停止や幹線道路の崩壊、架橋の取り付け部の破壊などにより燃油の輸送は1週間程度は止まるものと考え、その間の沿岸地域への燃油供給の備蓄体制を整えなくては、中標津町の後方支援体制は整ったとはいえないのだと、石川県の今日に至ってもいまだ孤立集落の存在する報道に接し、あらためて対応研究の必要性を訴える今回の視察研修でありました。